

醉 夢 樓 隨 筆 (5)

性 本 草

川 崎 正 悦

昭和6年4月発行の「健康時代」第2巻4号に牧野富太郎博士の性慾礼讃の歌が21首載っている。其中に、

- 生殖の力あるうち人の花
これなきものは石仏なり
- 性の力の尽きたる人は
呼吸イキをして居る死んだ人

と云うのがあるし、又永井藩博士の「夫婦随想」の書出しに「有名なフランスの女流文士ジョルジュ、サンドは、感覚をもつて、靈魂を裏切ることなく、靈魂をもつて、感覚を裏切ることのないのが、真の恋愛である。と申しています。これは端的によく恋愛の金的を射ぬいたものということが出来ましょう。神は、自然は、生殖のために力強い性慾を与えました」云々と書いています。小説には川端康成の「虹いたび」を持ち出すまでもなく幾らでも強大な性の力を取扱つたものがある。然し何もそんな事を今更ら鹿爪らしく引用するまでもなく、食慾と性慾は動物にとつて絶大な本能であることは先刻皆さん御承知の事で、法法華経と啼く鷺も、田に鳴く蛙も歌謡みと思いきや皆恋の奴否恋の使徒である。性の作用が無ければ、動物と云はず生物の大半は忽ちにして絶滅に瀕するであろうと云う考えのもとに、私は昔本草時代には、性方面にどんな薬草を重んじたかを振り返つて見たのである。性本草と云う題名は、漢方薬の中から性に関したものを抜いたので、私が勝手にそう名付けたままで、今までそんな名を見た事がない。

何首鳥 ツルドクダミ

葉の形がドクダミに似て蔓性であるために和名をツルドクダミという。昔、支那に何首鳥と云う人があつて、藤トウ(つるもの事)が夜交るのを見て、之を採つて食べたならそれが非常に効果があつたところから、その発見者の名に因んで名称としたのである。李翱の何首鳥伝に「何首鳥は順州南河渠の人で、祖父の名を能嗣、父の名を延秀といつた。能嗣は本の名を田兒といひ生来性器が弱小で、その機能を缺き58才になるまで妻を娶らず早くから道教の方術に心を寄せて、山中の修道生活に入つていたが或時山酒の酔心地がことによつて、草枕に横つていると、ふと目の前にある二株の藤が3尺程隔つて生えているのであるが互に蔓と蔓とが抱き合つて久しくしてまた離れ、離れてはまた抱き絡

まる。その有様が田兒には如何にも不思議で堪らなかつたので、翌朝その根を掘つて持ち帰り、同輩に尋ねて見たが一人もその名を知るものがなかつた。その後、ある老修道士に訊ねるとその修道士は「お前には世嗣がないそうだが、この藤はそれに不思議な効力があるものだ、恐らく神仙の妙薬であろう、早くそれを服むがよい」と話した。そこで田兒は早速それを粉にして、酒で一錢匙づつ服んだところが7日経つと何となく性的な衝動を感じ始めた。数ヶ月経つと生来不能であつたものが頗る強健となり、それ以来大いに有望に感じたので、怠りなくそれを服し、一ケ年過ぎると、在来の諸疾病は悉く全癒し、白髪は黒くなり、容貌は若くなり、十年間に数人の男子を儲けた。そこで名を能嗣と改めた。又その子の延秀にも与えて服ませたらこれも160才の長寿を保つた。その延秀の子が即ち首鳥であつて、首鳥もその薬草を飲んで数人の子を儲け、齡130才でまだ頭髪が黒かつた。首鳥と同郷で親交のあつた李安期という人も、ひそかに此薬を服し、やはり長寿を保つたという。かように珍らしい事を聞いたから、茲に書き陳ねて世に伝えるわけである」(本草綱目卷六)

何首鳥には外に交藤、夜合、地精などの別名もある。何首鳥を飲むと髪が黒くなり、筋骨が強くなり、精気が壮んになり、生殖力を完全にし、天年を延べる。然しその用法は中々六ヶ敷く、本草綱目には次の様に書いてある。赤、白の何首鳥各1斤を米泔水で3、4日浸し、蜜ミツのかけらで皮を刮り去り、2升の黑豆をまぜ、先ず砂鍋に木甑を載せて、その中に豆と何首鳥を幾層にも重ね、蓋をして蒸す。豆が熟したなら、その時取り出して豆を取り去り乾して粉にし、また別に赤、白の茯苓各1升を皮を取つて粉にし、水を加え膜や浮くものを取り、沈澱するものを取り去つて、塊にし、人乳を加え乾かして粉末にし、さらに牛膝の苗を加えて、1日間酒に浸し、7回目に何首鳥を蒸す時に、共に甑に入れて9回蒸して、晒し又更に当帰と枸杞の実、兔糸子を酒に浸したものを加え、猪骨脂を黒脂麻で香しく炒つた(いずれも鉄器を忌む)ものを混ぜて、石臼で粉にし、煉蜜で和して、弾子大の丸薬を作り1日3箇づつ、毎早朝には温酒で飲み、正午には薑湯で飲み、就寝時には塩湯で飲むとよい。という次第だから中々もつて面倒である。

刈米博士の邦産薬用植物には、根を乾燥したものを何首烏と称し、専ら強壯薬とする1日量10~20瓦を煎剤として用いる。成分は根にオキシメチルアントラピノン化合物を含有するとある。

淫羊藿 ホザキノイカリソウ

本草綱目に、弘景曰く「人之を服すれば好んで陰陽を為す。西川の北部に淫羊あり、1日に百回交合す、蓋しこの藿を食するが為めなり。故に淫羊藿と名付く」とあり又同書に時珍曰く「豆葉を藿という、この植物の葉は、豆葉に似たれば藿と名付く」ともある。イカリソウの別名は三枝九葉草、千両金、仙靈脾など多数ある。やはり本草綱目に男子絶陽で子無きもの、婦人絶陰で子無きもの、老人の昏耄、中年の人の健忘、一切の冷風、労気、筋骨の攣急、四肢の不仁、腰膝を補し、心力を強くする。とあるからその効能書きは大したものである。

寛政6年に出た異名分類抄にも、淫羊藿一名うむきな、やまどりぐさ、又まらたけりぐさと出ている。イカリソウという和名は、花が錨の形だからである。用法は、仙靈脾酒として飲むのが一番よいらしい。食医心鏡に、仙靈脾酒は男性を益し、陽を興し腰膝の冷を治す、淫羊藿1斤を酒1斗に3日間浸して逐時飲む、とあり。聖恵方には、皮膚の不仁に仙靈脾酒を服するがよし、仙靈脾1斤を細かに刻み、生絹の袋に盛り不津器（酒が外面に浸出しない器）に入れて無灰酒2升に浸し、幾重にも封じて春、夏は3日、秋、冬は5日の後に毎度暖めて飲む。その間ほろ酔の状態がよい。決して酔い過ぎてはならない。酒が尽きたら再び合せて用いるがよい。必ず効験がある。然しこの酒を合せる時には絶対に鶏、犬、婦人に見られてはならない。とある。仙靈脾を仙靈脂と書いた本もある、人の臍を毗ともいうから、毗の下を補う意味で、この方が面白い、邦産薬用植物には、支那ではホザキノイカリソウ、日本ではイカリソウ又はシロバナイカリソウを乾燥したものを淫羊藿という。漢方では、淫羊藿は補精強壯薬とし、特に陰萎、健忘症に効があると云はれる、1日用量8瓦を煎剤として用いる。夏私の候地上部を刈り取って陽に当て、乾かす。成分は全草にイカリソニンと云う配糖体を含むとある。

烏頭 トリカブト

元来、母根を烏頭、子根を附子と云うのだが、現今薬種商は根を其まま乾燥したものを烏頭又は草烏頭と呼び、根の両端を僅か切り取り、塩水に数日浸して、毒の一部を抜いて乾かしたものを、附子と呼んでいる。附子はアイヌが毒矢に使用したことで、人によく知られているし、近くは、これを久しく服用された白井光太郎博士がこれが為めに落命された事も、あまり

に有名な事実である。同博士の処方は、傷寒論（二千年前の本）の漢方、天雄散によつたものであると昭和6年の「健康の友」誌上に博士自身で発表された。それには、日本烏頭20匁、桂枝7匁、白朮7匁、牡蠣7匁以上四味を薬研で粉にし、1回に2分5厘ずつ用いる、服用の効果は氣血の循環がよくなり、食慾が増し、大小便の通じがよく又勃起力が出了、予は69才（昭和6年）で子女が7人ある中、2人は63才と65才の時の子である。其迄は養生などと云う事は心に止めなかつたものである。ところが66才になり、老境に達して、始めて陽道が衰えたのを覚えた。それから不老法の研究を初めて今日に及んでいる、予の不老法の効果は、今後の成行きに徴すべきであつて、速断を許さぬものがあるが、兎も角差し当り若返つた様に自ら感じているのである。この天雄散は浅田宗伯先生が百薬の長となすと云つて居る薬剤であるが、之は劇薬であるから分量が過ぎると眩暈して死んだ様になる。又極量を過ごせば生命を失う事になるが、分量より非常な神効を奏するものである。予の処方原方より分量を少し変えてある。と慎重を期していたのであるが博士がこの文章を発表された翌年、この薬の為に斃れた事は、返えし返えしも遺憾な事である。

キムラタケ 一名オニク

富士山の一名物にお肉と云う物があつて（日光の金精峠が本家かも知れないが）石室で売つている。私が今所持しているのは、もう大分以前8合目の石室で買つたのであるが其時これは何の薬になるかと尋ねたら風邪によく効くとの答えであつた。お肉と云うのは支那の肉 蕪 蔡だと思つて、昔そう呼んだのである。そのお肉は即ちキムラタケで長さ15~30cm許で、細長く下方は鱗片が重り、上部はささくれ立つて、丁度松球を長く引き延したようで、全体褐色である。此の植物はハマウツボ科に属する1年生の草本でミヤマハンノキの根に寄生し、高山の樹陰に生ずる。日光、御岳、駒ヶ岳、八ヶ岳等に産し又北海道の山にも産する。特に日光に産するものは昔から有名で、腎経を補助する効があると云はれている。牧野博士は大正6年、植物研究雑誌第一巻4号に『キムラタケはキムラタケ即ち金麻羅草の意味で、此物が日光の奥の金精峠に産する所から、昔誰かが此様な戯けた名を付けたと見える、そしてキムラタケと剝出しては余り可笑しいから、之をキムラと振らして其意を髣髴させ、表面真面目らしい名としたのではないか。或は元元は剝出しのままのキムラタケであつたものが、年を経るままに自然に之がキムラタケとなり、更に転じてキムラタケと再変したのかも知れない。金精峠には其半腹の処に一祠があつて（今はなくなつてゐる）銅に鍍

金した穂かならぬ陽物が祭られてある。之を金精権現と称する。是があるので、其山の名も金精峠と呼ぶ様になり此金精峠にお肉が生ずるから、前述の如く、始め之をギムラタケと唱え出したものであろう。又植田孟縉の日光山志（天保8年）には「此峠の古名は燧峠なり。和名抄に木枝相交下陳を燧と云う。されば五音相通じけるより、いつしかきむら峠と転誤せるなり。茲の山中に肉蕨藜多く生ず。此草は薬品にして腎経を補助するものなればとて、何者かが茲に陽物を祀りて金精と称し、古名こむらを転じてきむらと唱えしより、今は又転誤してきむらの音をまに替えて、鄙劣の唱えをすること笑ふべきにあらずや。されど五音に通用することより起れり」とある。これに拠れば金精峠は元燧峠といつたものと見える。そして此ギムラタケは此こむら峠に生ずるので、優コムラタケであつたものが、ギムラタケとなつたとすれば、別に可笑しい事はない。然し何れが本当か、私には判らない』と書いている。又まだ私は試みていないが猫がギムラタケを好む事マタタビ以上であると何かの本で見た事がある。以前は肉蕨藜にギムラタケを当てていたが、肉蕨藜はギムラタケとは別種で、亜細亞大陸の中部に産する寄生植物であると牧野博士は断じられた。

地 黄 サオヒメ

本草綱目に、血を涼し、血を生じ腎水の真陰を補し、皮膚の燥を除き、諸虚熱を去る、又男子の五勞、七傷、婦人の傷中、胞漏下血に主効あり、悪血、濁血を破り、大小腸を利し、胃中の宿食飽力の断絶を去り、五臓内腸の不足を補し、血脈を通じ、氣力を益し、耳、目を利す。などあり西鶴ものや川柳にはよく出て来る代物である。

水切れにつき当分のうち地黄丸

地黄のむうち間男が出来るなり

その地黄丸と云うのは、綱目に地黄根を洗浄し搗いて汁を絞り、ねばるまで煎じて白蜜を入れ、更に丸にし得るまでに煎じ梧子大の丸にして、毎早朝温酒で30丸を服し、日毎に3回服す。また青州の粟を和して丸にするもよい。或は別に乾地黄末を管に入れて、丸にして服するもよい、百日服すれば、顔が桃花のようになり、3年服すれば、身体が軽くなり老衰せぬとある。又抱朴子には、楚文字は、地黄丸を8年間服して夜中でも物の形をよく見たとある。

地黄の名称に就いては、綱目に、生のものを水に浸して浮ぶものを天黄と名付け、半ば浮沈するものを入黄と名付け、沈むものを地黄と名付く、葉には沈むものを佳とし、半ば沈むものは之に次ぐ、浮ぶものは用いるに堪えずとある。サオヒメは支那原産のゴマノハダサ科の植物で、園圃に栽培する多年生の草本であ

る。その薬効は刈米薬学博士によれば、根茎を採集したものを地黄と称し、漢方強壯薬とし、殊に結核性衰弱に賞用される。1日量5~10瓦を煎劑とする。成分は、根にマンニト及び糖類を含有することが知られているだけで、まだ特殊成分は発見されていないとある。

石 南 シヤクナゲ

駒草が高嶺の女神であれば、石南は高山の男神と云うところである。然しその葉には結晶性苦味質ロードトキシシンと云うアルカロイドを含み、この物質は運動神経麻痺、呼吸困難、四肢攣縮、呼吸中枢麻痺を起すと云う恐ろしい毒物で、家兎では体重1疗につき致死量皮下0.35疗、静脈で0.18疗であるが、漢方ではよく乾燥した葉を強壯剤に用いる「腎氣内傷陰衰を養い筋肉、毛皮を利し、脚弱五臓邪氣を療し熱を除く、女子は久しく服すべからず。男を思はしめ能く腎氣を添う」とある処はどうも男神らしい。民間薬としては、葉を利尿剤とし、腎臓病に用いる。大正の終り頃であつたか「主婦の友」が石南葉を持薬として、代々続いて長命である云う武内宿禰の子孫を紹介し、石南葉の広告を掲載したことがあつた。

山 茶 黄 ハルコガネバナ

ミズキ科の植物で、早春葉に先んじて、黄色の小花を簇生する落葉の小喬木で、よく茶花に使はれる。倭漢三才図会に「陰を強くし、精を益し、五臓を安んじ、九竅を通じ、ただに小便を利するに止まらず、腎氣を補し、陰莖を堅くし、仲景八味丸と共に之を用ふれば、其性味知るべし」とある。「邦産薬用植物」には山茶黄は果実を採集乾燥せるのなり、奈良県吉野郡に産するも僅少にして、殆ど支那より輸入す。成分は没食子酸、林檎酸、酒石酸等を含有す。漢方、山茶黄は強壯薬とす。用量5瓦内外、山茶黄酒は之を酒に冷浸せるものなり。とある。

北五味子 チョウセンゴミシ

チョウセンゴミシはモクレン科の植物で、同科のマツバサに似て実が赤い。享保年間に朝鮮から種子を伝えたのでチョウセンゴミシと云うが、日本にも自生がある。五味子とは其実の皮と肉とは甘酸、核中は辛苦、全体は鹹味であるから名付けたと云う。綱目に「氣を益し、顔逆上氣、勞傷瘵に不足を補し、陰を強くし、男子の精を益す」とあり、千金月令には「五月には五味子を常に服して五臓の氣を補い、盛夏と夏末に体力が衰えて、氣力が発動せぬ場合には黄氏、麦門冬を与え、少量の生黄蘗を加えて湯で煎て服ませるとその患者は、精神頓に加はり、両脚の筋力が増す」とある。又抱朴子には「五味子は五行の精で、その子（種子）には五味がある。淮南公羨門子は16年間これ

を服して顔色玉女の如く、水に入つて霑はず、火に入つても灼けなかつた」とあるが、そこまで行つては如何に五味子が靈薬でも最負の引倒し位では済まされまい。まだある千金方には又「陽事不起には、新五味子1斤を末にし、1日3、4回酒で方寸匙を服むとよい、但し、猪、魚、蒜、醋を忌む。一劑を尽く服すれば百日に互つて十女を御し得る効がある」と書いてある。「邦産薬用植物」には北五味子は、成熟せる果實を採集して乾燥したるものなり。本品は暗赤色又は暗紫色を呈し、屢々類白色の粉層を被り、著しく皺縮し質は柔軟にして内に2個の種子を包藏す。本品は酸臭あり酸味強く稍甘し。漢方、北五味子は専ら強壯並に鎮咳薬とす。と出ている。

天門冬 クサスギカズラ

主として海辺の地に生ずるユリ科の多年生草本で、根莖は短形、多数のダリヤの薯のような紡錘形根を叢出している。アスバラガスの類であるからよく似ているが、上部は他物に巻き付く。本草綱目には「骨髓を強くし、三虫を殺し、伏尸を去る。久しく服すれば身体を軽くし、氣力を益し、天年を延べ、飢えることがない」とあり、又「腎氣を通じ、消渴を止め、熱中風を去る、濕疹を治するには久しく服するがよい。煮て食えば肌体を滑沢にし、色を白く淨かにし、身体上の一切の悪氣、不潔の疾を除く」とある。猶禹錫曰く「山中生活に入つた時は、天門冬を蒸し、煮て食うがよい。それで充分穀食を断ち得る。若し努めて是を服食するには散にして酒で服すればよい。或は搗汁を膏にして服するもよい。百日継続すれば、体力壯健になること求(オケラ)や黄精に倍する。二百日継続すれば、筋髓を強くし、顔色を移ろはしめぬ。煉つた松脂と共に蜜で丸にして服するば更によい。杜紫微は、これを服して80人の妾を御し、140才の長寿を保ち、1日300里(邦里50里)を歩行した」とも出ている。又列仙伝には「赤松子は、天門冬を食つて一旦落ちた齒が再び生え更り、髪がまた生えた」とある。服食法は、8、9日天門冬の根を採り、曝乾して末とし1日3回、方寸匙ずつ服すとある。天門冬を服食した時は、鯉を食う事を忌むと云う事である。天門冬を服し

て50日に達すれば、奔馬に追い付くことが出来ると云うが、これはホンマではあるまい。「邦産薬用植物」には天門冬はクサスギカズラの根を採集し乾燥せるものなり。本品は略紡錘形をなし両端漸尖、長さ大約5~10厘、外面は類褐色半透明にして質柔軟なり。味は稍苦し。漢方、天門冬は鎮咳、利尿及強壯薬とす。と簡単に片付けてある。

菟糸子 ネナシカズラ

ネナシカズラはヒルガオ科の一年生の寄生草本で、莖は黄色無毛で糸状をなしている。芽生えの時は根があるが成長して宿主にからみ付くと根を失つて仕舞う、莖は左巻である。牧野博士は菟糸子はマメダオンに当てるべきだと云はれるが、茲では漢薬としてはネナシカズラを菟糸子として使つていたので、それに従うことにする。この菟糸子も本草綱目には中々大した効能を挙げてある。即ち「菟糸子は肌を養い、陰を強くし、筋を堅くし、莖中寒して精の自ら出るもの、口が苦くて躁調するもの、寒血で積となつたものに主効がある。久しく服すれば、目を明かにし、身体を軽くし、天年を延べる」とあるし、又「男子、婦人の虚冷を治し、精を添へ、髓を益し、腰疼、膝冷、消渴、熱中を去る。久しく服すれば、面黧を去り、顔色を悦沢にする」ともある。用法は「陽氣の虚損には菟糸子(ネナシカズラの実)と熟地黄等分を末にし、酒類で梧子大の丸とし、50丸ずつ飲む。氣虚には人参湯で服し氣逆には、沈香湯で服す。とある。「邦産薬用植物」には菟糸子はネナシカズラの種子を採集せるものなり。本品は赤褐色又は暗褐色を有する略心臟形の粒子にして直径2粒に過ぎず、其100粒は重さ約0.75瓦なり。本品は氣味緩和にして油様なり。成分は種子牛に樹脂様配糖体を含有す。漢方、菟糸子は強精及強壯薬とす。1日用量8瓦、煎劑とす。民間、莖の搾汁を顔に塗れば面黧を去ると云う。と出ている。

黄精 ナルコユリ

此薬草も当然ここに加えるべきであるが之は前回山の植物食べ歩記に書いたから若し読者御見落しの節は、それを御読下さい。

新刊紹介

生物実験ノート

兵庫県生物学会編

生物を研究するには書物を読み、先輩の話聞くことも必要であるが、実験、観察をすることが更に必要である。ほんとうに生物を理解するには、自分で生物を観察し、実験して初めて目的を達成することができる。それには適当な手引が必要である。今までに生物実験の手引書がたくさん出版されているが、すべて大部冊のものばかりである。殊に、高校、中学校などの生徒実習用としては適当なものがない。

それで生徒むきの実験手引書をわれわれ一同で作ろうということになり、主として、県下高校の先生方に、最低限度の実験事項を撰択して戴き、各事項に10人ずつの先生方が加筆消滅して原稿を作製した。更に阪神間の先生方16人を委員にあげて、各専門の分野の整理をして戴き、数回の会合の結果、文の統一などをして発行した。

A5 33ページ、定価35円、送料8円、昭和30年6月発行 発行所 数研出版株式会社(京都市中京区富小路二条上ル)